

デシャルム大尉の「江戸・新潟を結ぶ二街道」

澤 護

デシャルム大尉が明治6年に発表した「草津紀行」についてはすでに記述したが¹⁾、大尉にはもう一編の紀行「江戸・新潟を結ぶ二街道」がある。これは、明治7年の夏期休暇を利用し、武蔵、下総、下野、磐城、岩代、越後、信濃、甲斐、駿河、相模の各国を回った旅行記で、明治8年1月13日の夜に、横浜居留地20番のグランド・ホテルで開催された日本アジア協会の総会の席で口頭発表された。この時の模様は当時の新聞記事などに詳しく²⁾、デシャルムの内陸旅行が出席者に大きな関心を与えたことが知れる。

前年の草津旅行に際しては、陸軍省の騎兵大尉・奥田賢英がデシャルムに同行していたことが判明しているが、今回の旅行に初めから同行者がいたのかどうかは不明である。「草津旅行」の方は地名の読み方などはほぼ正確で、また誤植が極めて少ないが、今回の紀行では地名に関わる誤植、あるいは読み誤りが実に多い。それだけに、地名の割りだしには非常に苦勞させられることになり、今もって正確に把握できない個所がいくつもある。これら誤記または誤植と思われる地名は原典のまま括弧内で示しておくが、これらは原稿の誤りであったのか、植字工の活字の選択が悪かったのかとまどうところも多い。

デシャルムの紀行は2編とも宿泊した旅籠、そこでの食事、日本人の動向、物の価格などには一切触れてないため、旅行記としてはかなりもの足りないところがある。それでも、一般の人なら旅をしない各地の情報は興味深く、那須地方の欧米人の手になる最も古い記録ともなるだけに貴重な面も少なくない。

「この旅の主なる目的は、猪苗代湖方面の北方を旅し、そこから会津地方を通り抜け、猪苗代湖から注ぐ川沿いに新潟に至り、信濃の山岳地方を甲府にぬけ、富士山に至るに好都合の地点まで西海岸を南に下り、富士山からよく知られた街道のひとつを通して東京に至る旅をすることであった。³⁾」

明治7年8月5日に東京を出発したデシャルムは、8月9日に日光に到着したが、この行程とその特色はすでによく知られていることだとして省略してしまっている。それでも、付録の型でつけられている旅程表をみると、杉戸、新田、大沢でそれぞれ一泊している。これらの地名から、デシャルムの歩いた道程を探ってみると下記のようになる。

8月5日 東京・杉戸間 10里5丁（杉戸泊）

千住、草加、越谷、粕壁を經由したのはまず間違いのないところで、杉戸（Sujito）で一泊しているところをみると、東京の出立は少し遅かったのかも知れない。

8月6日 杉戸・新田間 10里13丁（新田泊）

杉戸からは下総国の西宝珠花に至り、江戸川を渡し舟にて東宝珠花に向かい、関宿江戸町、境、諸川、結城を経て下野国の小山に到着。ここから新田（Shinden）に向かい、ここで一泊。新田なる地名はあちこちにあるが、下野国下都賀郡の大町新田であったものとみられる。大町新田は日光街道の小山宿と小金井宿のほぼ中間地点にあり、思川流域に位置していた。この（大町）新田なる村名は明治6年初頭に羽川と改称されたので、デシャルムがここを通過した時には羽川宿となっていたはずだが、なぜか旧名をそのまま使っている。

8月7日 新町・大沢間 11里（大沢泊）

この日の行程は、新町，小金井，石橋，雀宮，宇都宮，徳次郎を経て大沢（Ozawa）に至ったわけだが，これが有名な日光街道で，デジャルムは前年に例幣使街道を通っているのだから，今回の旅は別の街道を選んだわけである。大沢宿は今市宿へ2里，会津街道の大桑宿へは2里21丁，上徳次郎宿へは1里32丁のところであり，交通の要所で古くから栄えた宿である。なお，デジャルムは大沢をOzawaと表記しているが，「おおさわ」が正しい。

8月8日 大沢・日光間 4里（日光泊）

大沢より今市を経て日光への距離は4里弱で，この路側は老杉が並列する有名な名所だが，デジャルムはなんら叙述をしていない。8日と9日は日光泊。

8月10日 日光・船生間 5里（船生泊）

「10日からの行程は，ほとんど訪れられることもないこの地方を旅しようと思う人たちには，なんらかの関心を持たれよう⁴⁾」として，かなり詳しい描写をしていくことになる。

「今町から路は美事な景勝地を通り大渡（Owatari）へ向って北方へと至る。（日光の急流）大谷川（Daiyagawa）を渡るが，この川は支流で鬼怒川（Kinagawa）になり，一層峡谷になり，流れは深く早く，鮎（ai）という魚がたくさんいる。この流れを荷馬では渡れず，左岸の次の宿場はこの川から30丁もあるので，旅はかなりの遅延を生ずることになる。さして重要でもない村，船生（Funania）⁵⁾で一泊」

日光・今市（Tamaichi）間は2里で，今市・船生間は3里15丁ほどだから，鬼怒川の徒渡にかなりの時間をとられ，この日は5里ほどしか進めなかったことになる。終日雨が降り続いたので，おそらく予定になかった小

村の船生泊りとなったのであろう。船生は明治初年にあっては舟生といい、明治10年頃には西船生とも称し木材の集積地であったが、ここから藤原、高原、中三依、横川の各村を通り、岩代国へ抜ける会津西街道があり、さらに高原からは平家の落人部落のある湯西川へ向かう小径もあったので、若干の旅籠は存在していたであろう。適切な資料は目にしていないが、船生の明治24年の戸数は318戸との記録があり、この地方ではかなり大きい。

大渡は今市と船生とのほぼ中間点に位置し、大谷川と鬼怒川の合流点に近い村で、河内郡の大桑のそばにあった。このあたりの地名は、字に編入されたり、なくなったりで改廃がはげしい。

8月11日 船生・石上間 約7里（石上泊）

「船生から^{たまにゅう}玉生（Tamania）までは1里28丁、玉生を8丁ほど進んだところで急流があるが、浅瀬ずたいに歩いて渡れる。川幅はおよそ30メートルだが、時として渡れないこともある。土地の人は荒川と呼んでいる。この急流から^{たかあつ}高阿津（Takauchi）までは2里10丁、道は樹木でおおわれ絵のようで、流れは速い。道はほぼ東方向。

高阿津から石上までは3里。さほど大きくないふたつの流れを歩いて渡れるが、石上に到着する直前に、箒川（Hokigawa）というしばじは渡れないかなりの流れが北から南へ走り、これを横切らなければならない。この道の方向はほぼ北。⁶⁾」

日光から今市を通り船生、玉生に至る道は日光北街道といい、奥州方面より日光への近道で、参勤交代の際に諸大名がよく利用していた。船生・玉生間の里程1里28丁は、この頃に駅遞寮が作成した「郵便線路図」にある1里26丁54間5尺とほぼ一致するので、「二街道」の付録にある7里28丁は誤りということになる。

デシャルムが書いたTakauchiの地名の割りだしはことのほか難しかった

だが、玉生から倉掛を通り矢板までの距離が2里10丁であるから、この地方を丹念に調査してみると、矢板の近くに高阿津^{たかあつ}なる地名があった。まず塩谷郡高阿津村に間違いなく、箒川中流左岸に位置する。明治7年の「那須ノ原入会組合村高戸数取調書」によれば、この村の戸数は17戸とある。

船生、玉生などは街道筋であるが、明治20年代の日本名所図絵といった内国旅行書をも、この辺の地名はほとんど紹介されていない。また、この2村には明治5年7月に郵便取扱所が開設されたが、明治21年まで調べ上げてみても、この2局を発着した郵便物は1通も記録されていない。実に開拓が遅れていた地方であるかがよく知れる。

8月12日 石上・湯本間 約10里（湯本泊）

「石上より木綿畑^{きわたはた}（Kiwattahada, Kiwattakada）までは5里。後半の3里は那須野ヶ原の大原野を渡る。この原野は約10～15里の距離に、3～5里の幅を有し、日本における全ての「原」のように草とシダでおおわれている。木綿畑は数軒の農家から成り立つ村だが、ここまでは家屋に出くわすことはない。ここに到着する前の1里は、旅人はいまだ山の中にいる。澄んだ水をたたえる美しい溪流にぶつかり、またすぎまじい激流の跡を忍ばせる急流の乾いた川底には、巨大な石の塊や根こそぎにされた樹木が押し流されていた。那須野ヶ原の原野からは南東に筑波山が望め、那須岳（Nasusan）の雄大な連峰が南西から北東へ連なっている。

木綿畑からMuronoi（Menonoi, Murunoi）までは3里、大変に悪い道を越し、ふたつ目の原を渡ることになる。Murunoi村に到着する前に、那珂川というかなりの急流に達し徒渉しなければならない。Muronoiから湯本（Yamoto, 付録ではGumotoと記載）へは2里。Muronoiを立つと、那須岳の溪谷に到達する。道は極めて険しく、場所によっては大層ぬかるんでおり、時には急で岩がごろごろしている。勾配は非常に急である。晴天には那須岳の近隣の山頂が実に美事に望まれ、景観は南西か

ら東に向かって拡大な広がりを含み、すばらしい調和を見せている。⁷⁾」

石上村は那須扇状地の南西端にあたり、箒川に沿ってあったが、ここから那須野ヶ原台地の北部にある木綿畑までは、道らしい道はなかったはずである。この近くで渡った川は蛇尾川に間違いない。木綿畑から湯本に至る途中のMuronoiなる地名がどうしてもわからない。木綿畑から那須湯本に至る途中の村名だから、まず那須郡に間違いなく、高林村や百村の一带を調べたものの、それらしい地名はない。板室や鴨内の誤読とも思えないが、はたしてどうであろうか。8月12日と13日を湯本に泊まっているので、ここの記述が最も詳しく関心の持たれるところである。那須湯本を紹介した欧米人の紀行としては、これが最も古いものだが、デシャルムは次のように叙述している。

「湯本村は夏場の湯治客向けに専ら建てられた約30軒の家から成っている。鉱泉の流れが那須岳の麓、この谷間を通り南から北へと向っている。この村の道は1本で、それがこの谷間にあり、流れにそっている。この道の中心に2本の樋で水を運んでいるが、1本が水を、もう1本が湯を引いている。ふたつに仕切った5個の四角い湯坪が、ふたつの流れの間の道の30メートルほどを占有している。鉱泉はわずかの硫黄と明礬とを含んでいる。温度は(60度から62度と)非常に高いが、単純で巧妙な方法で栓を調整して、数分で適当な温度に槽の中で下げることができる。湯と水の流れは、こうして意のままに調節されるのである。これら鉱泉は“鹿ノ湯”と呼ばれている。猟師に射たれた鹿が本能のおもむくままに鉱泉へ向い、その後を追ってここにやってきた人が、初めてこの湯に入ったのだという伝説がある。

かって、村は今よりもずっと大きかった。ここは実によく保存のされている、少なくとも外観上だが、いくつかの寺から前方に見渡せる。こ

の村は現在の場所より800メートルほど離れたところに建てられたのだが、1857-1858年のすざましい洪水で全村が全滅した。そこで同じ災害に遇わないよう、谷のもっと高いところに再建されたのである。住民はわずか100人ほどで、村の取引は少量の硫黄と染料に使う若干の植物の天産物である。冬場には数頭の鹿が殺され、極くまれではあるが小型の熊も殺される。狩猟にはよい土地で、山鳩（やましぎ）や雉が多い。近くの溪流では鮎（ai）と山女（yamame）が捕れる。

村の北方に向かい、数分登ると、美しい那須岳の偉容と顔をつき合わせる。三峰の主峰からなり、そのひとつの茶臼岳（Chansugatake）は死火山である。正しい言い方をすれば、那須岳は活火山で、今も噴煙をあげ地響きがする。噴火口は直径でおよそ200メートルで、側面はがさがさし溶岩の噴出の跡をとどめている。この前の噴火は1730年に起こったと言われている。噴火口へ登るのは簡単で、近くの峰、毘沙門への登攀もできる。この湯治場は夏期にあっては快適な避暑地となるであろう。空気はすがすがしく、夜は涼しいが、大部分の旅行者にとっては、今しばらくの間は道の状態が悪いために、ここへ至るのを困難にすることだろう。まず、ヨーロッパの女性にとっては不可能である。⁸⁾」

8月13日は1日那須湯本に滞在したため、湯本の描写はかなり詳しい。デジャルムは明治7年（1873）の家屋30軒と記録しているが、慶応元年（1864）の那須七湯の戸数は35戸で人口133名、明治24年（1891）の35戸と151名の記録とを比較してみると、長い間に渡って戸数と人口はほぼ変わっていなかったことがわかる。

手負いの鹿を追って、猟師がこの湯をみつけたという話は今に伝わり、地元の人の間ではこの鹿は白鹿だったと聞いていると話す人が多い。

湯本村が安政5年6月に豪雨に遇い、13戸が流失して18名の死者がでたことは記録にあり、このため藩に願いで湯川右岸の高台に移転し、今の

旅館街である湯本大通りが形成されていったので、デシャルムの記述はまず信頼できる。

茶臼岳を死火山としているが、この山は明治14年に噴火が起こり、今も噴煙をあげている。那須五峰にあって最後に形式されたトロイデ型火山である。

デシャルムが湯本に滞在した12・13日の日中の温度が26度で、道がよくなれば避暑地として注目されていこうとする条は、今日の那須の繁栄ぶりからみて、先見の明があった記述ということになろう。那須の西方に塩原温泉があることにも触れているが、彼はこの地に赴いていない。

8月14日 湯本・飯土用 8里28丁（飯土用泊）

「湯本を発ち、川の左土手を渡ると旅人は那須の東斜面を降りることになる。4里に渡ってこの斜面は実に草木が茂っているが、道はぬかるみで、馬車の轍の跡が激しく、雨の後では難儀する。寺子(Tsunago)という貧しい小村に着くまでは一軒の家もない。寺子はせいぜい70人の人口で、資源は全くない。ここから白河へは、「原」特有の特徴を持つ広大な未開拓の原野を通り抜けなければならない。この距離2里15丁。⁹⁾」

デシャルムがここで渡った川は、那珂川支流の余笹川であろう。寺子村は原街道の宿駅として古くは家屋50軒と賑ったこともあったらしいが、明治初年にあってはほとんど人家もなかった。寺子は明治21年に子島と改称されたが、明治10年頃には寺子ノ内子島と呼ばれていた。寺子から大島に至り、白河に抜けたわけだが、ここからが岩代国になる。

白河から旧白河藩領の飯土用（飯豊）村に着いたが、この時の家屋は18-20軒とデシャルムは記録している。このような小村に宿をとることになったのは、湯本・寺子間の4里に思いのほか時間をとられたからであろう。

8月15日 飯土用・中地間 9里17丁（中地泊）

この日の行程は、岩代国岩瀬郡の飯土用（飯豊）から上小屋→牧之内→長沼と会津本街道の宿駅を通り、さらに滝（ノ原）をぬけ安積郡の中地宿へと北方に向かうものであった。東京を出発して10日目にして、やっと目的地のひとつ猪苗代湖畔に到着したことになる。

デジャルムが滝ノ原と書いた地点は、実は滝村ではなかったかと考えられる。滝ノ原なる地名は確かに岩代国にあるが、彼は長沼から1里のところに滝ノ原（Takinohara）があり、この付近を説明したあとで、八幡岳（Achimangatake）というなんともすばらしい山があることを記述している。滝村は岩瀬郡に属し、八幡岳の山麓、箕ノ子川流域にあったので、滝ノ原とは位置が違う。ここでは、滝村とみなさなければならない。

中地は猪苗代湖の東端から3キロほどのところにあるとしか、この古い村については書いてない。舟で猪苗代湖を横切って若松方面へ行けるが、湖面にはよく強い西方への風が吹き、このような時には普段使われているみすばらしい舟では航行できないので、中地に引き返えし福良を經由して会津への道を至るほかはないとしている。

8月16日 中地・会津若松間 約10里（若松泊）

デジャルムは中地から猪苗代湖に向ったが、天候は晴れていても西風が強くなり再び中地に戻っている。このような状況を語っているのが、先に示した件であるようだ。だが、この湖に関する描写はなかなか詳しい。

「猪苗代湖は日本で最も大きく、かつ最も美しい湖のひとつである。ここには東方と北東から2本の流れが注いでおり、周囲およそ4里である。会津で最も高い山のひとつ、北岸に聳える磐梯山を別にすれば、さほど高くない山々に湖は囲まれている。同じ岸側にいくつかの村があって、そこでは鮭と鱒、日本のあちこちの湖に特有なアカハラが捕れる。若松

と湖畔のあちこちの場所との間では、少規模の取り引きが行なわれているが、近隣地域における全般的な道路の欠如から商売上の動きをにぶくしている。日本の内陸の全てにいえることだが、ここでも立派な道路を建設することで、一般の富の増長はかなりの推進が期待しうる。

猪苗代湖岸は快適な避暑地として推薦できるが、欧米人が生活するうえではあらゆる物資に極めて不足していることを述べておかななくてはならない。気温は冷たく、冬には数週間に渡って川が凍る。¹⁰⁾」

8月16日と17日の2晩を若松で過ごしたデシャルムだが、若松については簡単な記述で興味ある内容となっていない。17日には、深い峡谷をうがった溪流沿いの温泉・東山を訪ね、この温度は50-55度で、味も臭いもなく、なんら塩分を含んでいないようだと言っている。ただし、東山温泉は含塩石膏泉と現在は言われている。

8月18日 若松・野沢間 8里13丁（野沢泊）

若松より会津坂下（Bange, Baje）^{ばんげ}を通り、舟渡で舟により只見川を越した。只見川は文政年間以降たびたび架橋されたが、よく洪水で流失し、舟渡と対岸の片門との間には渡しがあつた。ここからかなり急な束松峠を越したが、この峠の上には2軒の茶屋があり、美しい景観が楽しめるとしか書いていない。

越後街道の束松峠を西に下っていくと、宿駅の野沢に到達する。野沢で一泊したが、ここでは昔は人の往来が今よりはげしかったに違いないと書いたにとどまっている。ただ、この行程の途中でのこととして、このあたりの山では漆の木があり、その幹に水平に切り傷をつけ樹液を集めていること、風景は美しいが、道は悪く険しいとしている。目が楽しめば、足が難儀するのは内国旅行には常につきまとうとなげいている。

デシャルム大尉の「江戸・新潟を結ぶ二街道」

8月19日 野沢・津川間 8里（津川泊）

岩代・野沢から下野尻に向かい、そこから宝川（Hogawa）^{ほうかわ}を経て越後国に入り、津川へ到った。下野尻も宝川も江戸期の宿駅ではあったが、明治4年の下野尻の戸数80、宝川の戸数43戸と記録されている。いずれの村も、明治8年まで存続していただいだけである。

8月20日 津川・新潟間 18-20里（船中泊？）

デシャルムは津川から新潟まで岩代道や岩代支道を通らず、船で阿賀野川を下った。この距離は18-20里だが、流れが早ければその日のうちに新潟に着けるが、緩慢な時には翌日の到着になると書いている。この日は烈しい風が吹き荒れていたため、その日のうちの到着にならなかった様子である。

津川（Tzagawa）を発って4・5里の間は、切り立つ岩場の激しい急流を抜けなければならず、船頭の熟練と冷静沈着さが求められること、7間の長さに3・4尺の幅の舟であることが書き留められている。

岩代・野沢からは鳥居峠を越して越後国に入り、福取、津川、保田、水原を通り新潟に至る街道は早くから開けていたが、舟便を利用したのは期日の短縮をねらったもののようである。

8月21日 （新潟泊）

8月21日の夜、長崎に大きな被害を与えた台風が新潟を襲い、海岸沿いに北上していった。この影響は、津川・新潟間の船便にあったはずだが、この点の記述はない。

新潟の発展の上で実にゆゆしき問題は、河口の実に危険な砂州の存在で、これは会津方面から流れでる川が水量を増やして、すぎまじい量の土砂を運んでできたもので、同様に日本最大の河である信濃川も新潟港をふさぐ役目をはたしている。運河を建設して、このような危険な状況を打破

することだと主張している。

新潟の町そのものについては、人口が5万人を越していること、西部地方での最重要な商業地であること、開港地でありながら西欧人は5・6名しか居留していないことなどに触れているだけである。

デシャルムが旅したのとほぼ同じ頃に、内務省土木寮に雇用されていたオランダ人・リンドウ (J. A. Lindo) は信濃路を越え新潟に着いたが、彼は土木・治水関係の専門家なだけに河川に関する描写はデシャルムより詳しく、新潟についてこう語っている。

「新潟はあらゆる面からみて、商取り引きにはまさに格好の地である。信濃川が越後の荷物輸送にあって唯一ともいえる主要交通路であるだけに、新潟に立派な港湾施設が備われば、生産地より荷馬によって現在陸路運ばれている産物は全て、まず間違いなくこの地に集まってくる。しかし、砂州が現在河口に拡がり、それが今年には水深わずか5メートルを残すまでにふさいでいて、これが原因で新潟での取り引きは、ここ数年に渡ってほぼ完全に停滞したままになっている。この砂州の上に適当な防波（砂）堤工事がなされれば、あらゆる点で有益な事業となることは疑いがない。日本人が言うには、越後は日本で最も豊んだ国のひとつで、他の国々が蒙った飢饉には一度なりとも蒙ったことがないと自慢している。新潟から運び出される品の取り引きは、確実に重要となっていこう。この豊かな国で取れる主なる産物は米、茶、藍草、銅、石炭、石油である。」¹¹⁾

たまたま明治7年に、別々の街道を歩いて新潟を訪れたふたりの西欧人が、河口の砂州が新潟の発展を妨げていると同じ指摘をしているのは興味深く、彼らが一介の旅行者でなかったことを示している。デシャルムは会津路を歩いてきただけに、新潟と会津とを結ぶ交通路の確保が商業上の発

展に大きく寄与するとも語っている。

8月22日 新潟・竹ノ町間 6里20丁（竹ノ町泊）

新潟から竹ノ町へは海岸沿いに北国街道をたどったが、この間は砂地と水田があるだけだから、このあたりの記述はない。デシャルムは新潟・内野間を9里10丁と書いているが、この区間は3里18丁しかなく、また内野・竹ノ町間の4里も3里としなければならない。彼の示す里数はほぼ正確だが、ここの里程は大きく異なっている。

8月23日 竹ノ町・出雲崎間 8里18丁（出雲崎泊）

この日の行程は、竹ノ町からさらに海岸沿いに弥彦（Yashikoge）、寺泊、島崎を経て出雲崎に至るものであった。佐渡を往来する舟は、新潟の砂州をさけて寺泊に針路をとるとし、佐渡島について少し触れているが、デシャルムはここまで足を延ばしていない。

出雲崎は寺泊と同様に北陸の要港・要衝だが、彼は出雲崎が4キロに渡る大きな漁村で、海辺に数軒の気持ちのよい茶屋があり、浜辺は心地よいと書いたに終わった。

8月24日 出雲崎・柏崎間 5里30丁（柏崎泊）

出雲崎から^{しいや}椎谷（Hiza, Higa）の方向に行くと、南東にEchiungotateyamaが望まれるとしているが、雪を頂きにかぶっている南東に聳える山となれば、これはもう立山であろう。椎谷は年一度5月に馬市が開かれ、明治7年に2,000頭の馬がここで売られたことを記録している。

柏崎で24・25日の2晩を過ごしているが、柏崎そのものの記述は12,000人の人口を有する重要な商業地であること、明治元年にここで激しい戦闘がくり広げられ、その戦いの跡が今なお多くの家々にみられることだけしか記述していないので、2日間の滞在は雨のためか、柏崎の外港である鯨

波から黒井か今町に向かう舟便待ちだったものとみなされる。「天候が良ければ、(柏崎の舟着き場の) 鯨波から海路行く方がよい¹²⁾」と書いてもいる。

8月26日 柏崎・高田間 13里 (高田泊)

デシャルムは柏崎・鯨波間を1里、鯨波・柿崎間を5里、柿崎・今町間を5里、今町・高田間を2里と記録しているので、鯨波から今町までは舟便を利用したと判断したい。

鯨波をKujitanami, Penjiranamiとも記述しており、また越後・高田より2里の地点にある今町なる地名がどうしても確定できないため、かなり戸惑った。今町なる地名は今もって割りだせないが、どうやら直江津に近く、海辺の側の河口にあった黒井村の対岸の村だったようである。この辺は中頸城郡なので、少なくとも南蒲原郡にある今町とは距離的にも異なる。

「今町に到着する際に、河口に危険な砂州があり、風が北向きでない場合には航行できる。天候がよければこの航海は楽しく、しかも早い。また、はるか遠方に越中国の立山連峰を望める。なかなかの高さの山、米山の麓を通過するが、この山の頂上に寺があって、それが海からはっきりとみえる。この寺は4月から8月の間だけ人が訪れたり住まったりする。鯨波付近には断崖にいくつもの洞窟があって、舟で中に入って行ける。寺泊から今町までの海岸沿いはどこもかなりの人が住んでおり、取り引きは栄んで、気候はよい。夜は涼しく、海辺は海水浴に適している。海岸は静かで、貝殻が散乱していないためすばらしい。太陽と海風に焼け、漁業に勢をだす男たちはたくましい。女たちも力強く、男たちが普段やっているような実に厳しい仕事でもやっている。今町は人口6,000から8,000の大きな町で、取り引きの繁盛に役立っている川の左岸にある。」¹³⁾

デシャルム大尉の「江戸・新潟を結ぶ二街道」

今町から高田までは2里と書き、デシャルムはここで日本海側から信濃路をたどって内国へと入っていく。直江津・高田間は2里24丁であったから、今町は直江津の近郊にあったことになるが、地名改称でもあったものか明治10年代のいくつかの資料を調べてもでてこない。リンドウの「新潟紀行」では春日新田へ高田から向かい、そこから1里ほどのところに今町なる村があったことを記録しており、また明治7年の『地名字引』にもあるので、この村があったのは間違いない。

8月27日 高田・関川間 9里（関川泊）

高田・関川を9里と書いているが、実際には8里弱である。途中、新井、二本木（Nikogi）、関山を経由した。高田の人口が3・4万人、新井が4・5千人と書いているだけで、別に目新しい事柄の記録はない。関川はひどい村だが、本陣は立派だとしているので、この夜は本陣にでも泊ったのであろう。

8月28日 関川・善行寺間 8里20丁（善行寺泊）

この日の行程は、関川より国境の熊坂峠を越えるとすぐの野尻を通り、柏原、古間、牟礼、新町を経て長野に至るものであった。この日から信濃国に入ったことになる。

ここでは、野尻湖がきれいであること、牟礼（Murei）を発って間もなくの峠から見下す信濃川流域の広大な景観が美事なことと、善行寺について若干記述しているにすぎない。

8月29日 善行寺・坂木間 7里22丁（坂木泊）

丹波島（Tanpagima, Tanpajima）、篠ノ井、屋代、戸倉と北国街道を東京に向かって上っていったが、善行寺・坂木の里程を4里と書いているのは誤りで、これは篠ノ井・坂木間の里程である。

デシャルムは諏訪湖に向かうのに、松本を經由するか、あるいは北国街道をそのまま東にたどるかを丹波島で思案したが、松本に至るにはかなり険しい峠を越えなければならないとあって後者の行程を選んだ。「こんなわけで、われわれは（丹波島から）2里10丁先の篠ノ井に折れ、そこから千曲川の谷間と信濃川の支流に沿い、豊かで人家の多い地域を通り抜け、4里で坂木に着いた。¹⁴⁾」ここにおいて、初めて「われわれ」とあり、デシャルムに通訳か案内人かが同行していたことを示した。

越後の謙信（Kenshiu）と武田信玄（Shingiu）との日本の歴史で有名な戦いが、篠ノ井に着く前の平原で1520（？）年頃にあったと記述しているが、それ以上にはなんら触れていない。

8月30日 坂木・長久保間 9里30丁（長久保泊）

坂木から上田までは東へ一直線で3里12丁、「上田（Weda）は生糸製産の大集落で、人口4・5万人¹⁵⁾」とあるが、明治22年の上田の人口は15,000人との記録もあるので、4・5千人の誤りではないだろうか。

上田で北国街道に別れを告げ、保野を経過して長久保へ到着した。保野からの美しい道すがら、噴火口よりすざましい蒸気を噴き出している浅間山を楽しめるとだけ書いている。

8月31日 長久保・下諏訪間 8里18丁（下諏訪泊）

デシャルムは長久保・和田間を2里とし、和田・下諏訪間を6里18丁と書いているが、後者の里程は5里16丁から18丁なので、少なくとも1里の差がある。長久保から和田峠を越す中山道を辿り、下諏訪に着いたが、彼はこの地で2泊した。

「下諏訪村には温泉があり、三つの主な源泉は下記のものである。

1. 綿の湯 宿駅（本陣、Gohungin）の近くにある。浴場は清潔で、一

デシャルム大尉の「江戸・新潟を結ぶ二街道」

般の人にも親しまれている。温度は43度。土地の人たちはお湯に銀が含まれていると言って、銀湯と呼んでいる。

2. Koyu 明礬を含み、温度は極めて高い。
3. Tangayu 温度は極めて高い。

湖の反対側の上諏訪（Kunuwosowa）にも源泉がある。これらもまた住民にはよく利用されている。湖畔の気候は常に爽快で、27日（9月2日が正しい）朝6時の気温は12.5度を指していた。夏にここを訪れたら、健康には好ましい環境である。土地の者の話では、冬は寒さが大層厳しく、（1月と2月の）30日ないし40日の間、湖の厚い氷の上を横切ることになるそうである。釣りには申し分なく、この土地には獲物が豊富だという話である。晴れた日には、湖の中央から富士山を眺められ、湖を取り巻く山々沿いに、南東方向に広く開けたところにその秀峰を見せている。

湖は大きくなく、長さ2里で幅は1里である。しかし、いい位置にあり、すばらしい山々に取り囲まれている。この流れは大きな河である天竜川を経て太平洋に注ぐが、これは南東に向かって流れ、太平洋に面した（遠州国の）浜松に河口がある。

この川は日本における河川の最も重要なもののひとつで、まず踏み入れない山岳地帯を縫っている。その流れたるや激流といってよく、この急流を下るには危険を伴う。¹⁶⁾」

デシャルムが温泉・鉱泉に関心のあったことは「草津紀行」でよく知れるが、この紀行でも那須湯本と同様に下諏訪の温泉にも注意を向けている。明治7年当時、上田にひとりのヨーロッパ人が居住していたので、もしかしたらこの温泉まで足を延ばした可能性がないではないが、少なくとも記録に現われた限りでは、欧米人としてはデシャルムが最も早くこれらの温泉を紹介した。

それにしても、上諏訪のローマ字綴りと9月2日を27日とした誤記（誤植）はひどい。

9月2日 下諏訪・上蔦木間 8里（上蔦木泊）

この日の行程は諏訪湖の北側を通過して上諏訪に至り、甲州街道を金沢（Kanagawa）を経て上蔦木に向かうものであった。この間の道はよく、富士山が常に視野にあり、しかも快晴であったから、8里の道程は快適であった。上蔦木は甲斐国との国境ににあった村で、落合とも落合村蔦木とも呼ばれた村である。

9月3日 上蔦木・甲府 11里10丁（甲府泊）

上蔦木で信濃国に別れを告げ、甲斐国の台ヶ原（菅原）、葦崎を経て甲府に至る11里もの行程であったが、この間はほぼ富士川の支流である釜無川に沿っていた道である。台ヶ原は今はなく、白須村と合併して菅原村と改称になった。

デシャルムは葦崎に至る前2里18丁の地で円井（Tsuburai）なる地名を記録したが、この地名は少なくとも明治時代にはない。葦崎から台ヶ原までの往還の途中に、上（下）円井の地名が天保年間にあり、上円井村には一里塚があったので、その名残りであったろう。

葦崎は人口10-15,000人の大きな商業地として紹介しているが、明治7年の人口としては多すぎるように思われる。この時の甲府の人口19-20,000人だったというから、これと比較すると葦崎のそれは誤記かと考えたくなる。因に、明治24年の統計には、葦崎の戸数475、人口2,233名とある。

甲府は絹取り引きが盛んで、水晶も若干ではあるが取り引きされていることを記述した他に、「甲府で一籠25銭で売られているぶどうが、江戸に運ばれて1両以上にもなる¹⁷⁾」とデシャルムにしては珍しく物の値段を書き留めている。甲府・江戸間には甲州街道（Kofukaido）があるが、道の悪い

のと運搬する荷車が少ないからこのようなことになるかと判断している。

9月4日 甲府・川口間 9里18丁（川口泊）

甲府から石和に向かい、この地から山岳地方に入り御坂峠を越して川口村に至るのがこの日の行程であったので、沼津の方向に行って富士山登山を試みることはなかった。その代り、御坂峠を越しながら富士山と、眼下に広がる川口湖とを満喫している。石和から御坂峠に至る間に、Tonaki (Tonoki) という村を通過しているが、この村は御坂峠にさしかかる小集落の藤野木と判断される。

「御坂峠は日本の中央にあって最も登るに難しいもののひとつだが、最も興味ある峠でもある。

川口湖は（長さ）およそ1 - 2キロで、星の型をしている。この湖は御坂峠より注ぐ急流でたたえられているが、その流れ口は見あたらず、どこにも流れ出ているようには見えない。しかしながら、一般に海とつながっている川でしか見られない、すばらしい鮭の種類18)の鱒がここにはいる。富士山を取り巻いて同じような湖が八つあるが、その大半は河口が見あたらない。」

今日の河口湖が富士山麓の主役になるのは昭和39年のスバルラインが開通してからのことだから、実に今昔の感がある。

9月5日 川口・須走間 6里（須走泊）

この日の行程は、上吉田と山中の村々を通過して須走に至る6里であったが、須走はこの頃には駿河国駿東郡に属していた。この間はやや山岳地帯ではあるが、御殿場まで足を延ばさず須走で一泊したのか気になる。広大な荒野を歩き続けて、風景にも飽きたものか。

9月6日 須走・木賀 7里10丁（木賀泊）

須走から三島に抜けるのが一般の行程だと書いているが、デシャルムは御殿場から仙石原に至り、ここから木賀へと向った。木賀を目指した目的はなんら書いていないが、木賀温泉には明治6年1月以降に陸軍省にいたフランス人がよく逗留に来ていた。おそらく、この温泉の「亀屋」に宿泊していた同僚と落ち合う約束でもあったのだろう。

9月7日の夜は湯本に1泊し、翌8日に小田原から東海道を東京へと向った。木賀から東京への里程はよく知られていることだとして、この間の叙述はない。

デシャルムの「新潟紀行」はここで終わるが、明治8年1月13日の発表後、ハリー・パークス卿は日本の北部、西部および中央の旅行記に関して大変に感銘を受けたとしながら、発表に際し日本地図がないため、聞いた者には十分な情報を与えなかったのは遺憾であるとした。これを受けて、しばし日本地図の談義が続き、学会の手で精密な地図を用意しようとなった。

東京より新潟へは、信濃路経由と三国峠を越える街道があったが、デシャルムは那須から猪苗代湖にぬけ、新潟からは山岳に入るという一般には全く馴染みのない行程を選んだ。これは、彼が関心を抱いていた温泉の調査から那須湯本を選び、さらに下諏訪温泉へ回ったものではなかったろうか。

那須や河口湖が観光地として有名になってからまだ日が浅いが、100年以上も前に苦心惨憺しながらこれらの地を回ったデシャルムの労苦には脱帽の他はない。いずれの地も、欧米人では初めてこれらの地を訪れたのはデシャルムであろう。

ここで記述したように、地名の誤読あるいは誤植が非常に多い。このためか、リンドウの「新潟紀行」の方が、後によく利用されることになった

は仕方のなかったことだろう。

- 注 1) 「デジャルム大尉の草津紀行」(『敬愛大学研究論集』第36号)。
2) The Japan Weekly Mail, 1875. 1. 23.
The Transactions of the Asiatic Society of Japan, S1, Vol III .
Part II . pp.31-34.
3) Ibid., p.1.
4) Ibid., p.1.
5) Ibid., pp.1-2.
6) Ibid., p.2.
7) Ibid., pp.2-3.
8) Ibid., pp.3-4.
9) Ibid., p.4.
10) Ibid., pp.6-7.
11) “Description of a trip to Niigata, along the Shinshiu-Road and back by
the Mikuni Pass”. (The Transactions, S1, Vol III . Part I . p.68)
12) The Transactions, S1, Vol III . Part II . p.12.
13) Ibid., p.12.
14) Ibid., p.14.
15) Ibid., p.15.
16) Ibid., p.16.
17) Ibid., p.17.
18) Ibid., p.18.